

— 編集後記 —

久しぶりに編集委員をさせていただきました。あまりお役に立てませんでしたが、無事発行できてほっとしています。前回委員をしていたとき既に、女性学インスティテュートは曲がり角に来ていると言われていましたが、皆様のご助力でなんとかここまで来れました。それでも、もうそろそろ改革が必要な時期かもしれませんね。(K.M.)

「女性解放運動」はすでに過去のものとなり、「リブ」はほとんど死語となり、「フェミニズム」という用語でさえ翳りを帯びています。少子高齢化がどんどん進む日本社会では、生老病死の問題が私たちの心身を疲れさせ、どんな既存の「学」をも押し流して行きます。そうした危機意識からこそ「女性学」の希望の光も差すはずです。(K.N.)

21世紀となり、韓国では女性の大統領が生まれたにもかかわらず、日本では、不景気に伴って性差別が顕著になり、日本が世界の中でも女性の地位が低いことで目立つようになりました。ですから、ますます女性について研究されることが望ましいのだと思います。今回、女性について様々なジャンルにおける研究論文が掲載されたことに、一縷の望みを見出したと思います。(H.U.)

今回の特集は「女性学の可能性を問う」でした。「女性学」という言い方は、最近ではあまりされませんが、あくまで「女性」にこだわるところが、私は気に入っています。「女性であること」に、社会はどのような意味づけをしているのか、それは多様な生き方をする個々の女性たちに、どのような影響を与えているのかを、これからも考えていきたいです。(M.Y.)

.....